

日本語の初級授業形式

——二つのモデル授業——

森田 良行

1. はじめに

早稲田大学語学教育研究所における外国人留学生のための日本語授業には、語学教育研究所編の日本語教科書が用意されている。筆者はその初級教科書の編集にたずさわった関係から、まず、その教科書がどのような教育理念のもとにどのような授業を予定して編集されたものであるかを解説し、つぎにこの教科書が志向する授業形態として、日本語初級授業における二つの形式について実例を紹介しようと思う。(なお、本稿に述べるところはすべて筆者の個人的意見であって、初級教科書編集委員の合議による統一見解または日本語教室の公的見解ではないことを、あらかじめおことわりしておく。)

2. 初級教科書の構成

語学教育研究所編「外国学生用日本語教科書・初級」は文型中心に編集され、単純容易な文型から複雑長大な文型へと課が配列され、全体は40課からなる。各課は「本文、文型、文型練習」の3つに分れ、課によってはさらに「関連語彙」の項を持つ。「文型」とは、その課で学習すべき文型日録で、本文中の文例をもって示したもの。その各文型の語彙挿し替え練習を具体的に文字化したものが次の「文型練習」で、これは学習者が目で読んで自習することを目的としない。教場では本を開かせずに、教師対学生、学生対学生の口頭による会話のやりとりとして適宜、語彙の挿し替えを行ないながら、実物・標本・小道具・絵・写真、その他さまざまな教具を駆使して、具体的な場の設定のもとに進める表現練習、会話の受け答え練習、

口頭作文練習である。語彙の挿し替え練習と文の拡張練習、さらに文の言い換え練習、文の結合練習、文の展開練習などを含めた総合練習で、かなりの時間配当を見込んで作られている。

「本文」は特定のテーマについて、その課で扱う文型すべてを使ってまとめた会話または文章の見本で、各課の新出語彙もこの本文中に盛り込まれている。この本文のみは縦書きで、漢字かな交じり文。いわば「本文」は表記・語彙・文型の各面においてその課の総まとめ的性格を持ち、その課の各文型練習の総合として行き着く最終段階とも、また、その課で扱うべき各文型のそれぞれの文型練習の出発点とも考えられる。要するに「本文」が難なく通過できれば、その課の学習は修了したものと考えてよい。したがって、これも、学習者の独習読み教材として作成されたものではない。具体的な場の設定のもとに、教師对学生の対人関係に立って進められる、言語行為の実演教材である。それゆえ、場面や登場人物の名前などは適宜、現実のそれと挿し替えてさしつかえない。語彙面でも、学習者の能力が許すなら、その時の話題、季節、学習者の興味などにより、「関連語彙」を利用して幅広い話題や場面で本文練習を進めるのが理想的である。

さて、初級教科書には、別冊付録として単語表および漢字表が用意されている。「単語表」は各課の新出単語に対して英語訳を付したものだ。ただし、文法事項に関する語彙（たとえば、助詞・助動詞・補助動詞・接辞などのたぐい）は除いてある。「漢字表」は新出漢字に対し、その課での読み方ならびに筆順を示したものだ。その他に、本文のみを音声化した録音テープ1巻がある。

3. 初級授業の原則

まず、板書もノートもすべて日本文字を使用する。ローマ字書きや、英語、学習者の母国語による筆記をいっさい認めない。このことは教科書でも同様で、第1課から漢字かな交じりで表記され、ローマ字書きを採っていない。（もっとも、第1課にはまだ漢字が現われないが課を追うに従っ

てほしいに漢字がふえていく。)したがって学習者は、第1課にはいるまえに、すくなくともひらがな・かたかなは読めるようにしておく必要がある。が、初級授業の入門期では主として口頭による練習、話し・聞き的能力、つまり会話力養成を主眼として授業が進められるので、読み・書きは副次的なものとして、口頭練習のかたわら練習を積んでおけば、初級後半にはいるころまでには十分追いつくことが可能である。第1課から読み書き能力もがっちり身に付けさせていくという完全主義をとらない。初級入門期においては、授業の大半は口頭練習一本で進められ、教科書はただその記録の意味しか持たない。(したがって板書、ノート筆記もほとんど行なわれない。)ただ、完全に読みこなせないまでも、最初から日本文字に親しませておくことは、初級後半期にはいつてからの読み書き学習が楽になる。

新出単語には英訳を付した「単語表」が用意されているが、授業中はいっさい開かせない。授業中に未知単語にぶつかっても、板書でも口頭でも訳語で示すことはしない。文型練習中も、挿し替え語彙・手掛かり語彙(cue)の提示に訳語を添えることをしない。英語などで示すことは、日英両語の意味領域や用法が同一であると錯覚させてしまう危険を招く。たしかに意味理解のためには、訳で与えることがてっとりばやいが、その語のその場での意味がわかればそれでよいというものではない。訳による理解即日本語の修得を意味しない。語の意味や用法は、めんどろでも具体的な場を踏まえた文型練習や例文作成作業の中でつかませるよう指導したい。それによって単にその語の意味を知るだけにとどまらず、その語の使い方や、その語を含む文型の使い方までも確かな日本語力として身につけてくる。同様の理由で、文や句の場合も対訳法は採らない。(初級教科書には単語表が用意されているが、これは意味理解の手がかりを示すだけのものでしかなく、したがって、手がかりなど必要とせぬなら、むしろ使用せぬに越したことはない。残念ながら現段階では、訳語をまったく与えずに教

授する方法が完成されていないのでいちおう単語表を用意はしたが、意味を与える作業そのものを日本語練習としてもっていくことが望ましい。それゆえ教場では単語表は使用させない。

授業はすべて日本語で行なう。本文を英訳させたり、英訳してみせたり、英語で解説を加えたり、質問や解答を英語で行なったりなどいっさい行なわない。母国語ないしは英語による理解が即日本語の理解、日本語の修得とは考えないからである。日本語を英語なり他の外国語なりに置きかえて理解することは対照語学的な興味ばかりをかきたててしまい、マイナス面が大きく、以後の日本語学習や日本語使用に際していったん英語なり母国語なりに置き替えたがる悪い癖を学習者に植えつけてしまう。日本語は日本語の発想に立って表現や理解を行なわせたいものである。そのような訓練を施す場が教場であると考えると、厳しいようではあるが、日本語以外は厳禁という態度を固持したい。

文法解説・語義解説は行なわないことをたてまえとする。他の日本語教科書では文法解説をしているものが多いのであるが、語研の教科書ではいっさい解説を施さない。教場でも原則として解説によって理解させる方法をとらない。もちろん図式などで示すことも行なわない。これは、文法学習は文型練習の積み重ねそのものであるとの理念によるもので、文法現象を知識として解説しても、それは文法理解にはなるが文法修得にはならないとの考えに基づいている。(したがって文法用語たとえば「連用形」とか、「五段活用」とか、「Verb」とかもできるだけ用いないようにする。)要するに、習慣として言語表現を身につけさせることに専念し、理屈としてことばを組み立てさせることを意図しない。反射的に自然な日本語が表現できるよう文型練習を繰り返すことが大切で、知的に分析したり構成したりする能力は不必要どころか、かえって語学教育のじゃまになるとの考えに根ざしている。語義も、例文を多く与えることによって、文脈と場からおのずとはあくさせることが望ましく、辞書的解説や訳語への安易な置

き換えをしりぞける。

授業は直接法によって進めることが多い。そのため、種々の教具・教材の収集と利用をたえず心掛け、より効果的な教授法、有効な授業方法の考究を常に行なうよう努力する。

4. 初級授業の2形式

初級教科書が「本文」と「文型練習」を2本の柱として編成されていること、これをいま述べたような考えに従ってどのように有効に授業運営に生かしていくかが、初級授業の中心課題となる。いわば「本文」と「文型練習」とを実際の授業でどう関係づけていくか、そのからませ方の良否が授業効果の成否の決め手となる。

先にも触れたように、「本文」は文型練習の到達点とも出発点ともなり得る。各文型練習の積み重ねに具体的な場と共通の話題とを与え、それらを結び合わせれば総合的なものとして一つの「本文」となる。個々の文型練習からはいって最終的に本文を作り上げ、教材の「本文」へと導いていく方式は、総合型の学習と言えよう。いっぽう、まず「本文」から始め、「本文」の特定の話の場と話題を手掛かりに未修文型の文型練習へと歩を進めていくことも可能である。各文型練習の段階では、話の場と話題を取り替えて、それにみあった単語の挿し替え練習を行ないながら、その文型が持つ表現性や発想などをつかませ、その文型を身につけさせ、最終的には「本文」理解へと持っていく。このような、本文からはいって各文型へと掘りさげていく方式は、分析型の学習と言えよう。

文型練習を先にするか、本文を先にするかで、まったく相反する二つの学習方式、総合型と分析型の二つの学習方式が生まれるのである。

5. 二つのモデル授業

初級クラスは、1日2コマ4時間の授業を、週5日、計20時間行なうインテンシブコースである。この20時間コースに、通常1クラス3名の教員が当たり、初級教科書を分担制で担当する。したがって初級各課に対する

授業の時間配当，導入・展開・終結における時間配分，担当教員間の分担割りなどすべての授業計画は，日本語専修初級クラスの時間割によって制約されてくるのである。

さて，初級コースは2～3クラスあり，6～9人の教員が常に初級授業を担当していることになる。初級コースは1課から始めた場合でも，1学期（前期または後期の15週間）で修了することになり，学期ごとに担当教員も交替する。それゆえ，過去10年ほどの間に，語研編集の初級教科書を使用した教員はきわめて多数にのぼり，それぞれ独自の教案を用意し，各自の授業を行ってきたわけである。以下に紹介する筆者のモデル授業もその中のほんの一例にすぎず，このほかにも数々の授業方法がとられてきたと思われる。もちろん次のモデル授業が最善のものとは考えていない。一つの事例として叩き台を提供し，今後の教授法研究の足場となすことを願うのである。さらによりよい授業運営の開発に努力していきたいと思う。

総合型授業の例

（導入）学生に教科書を開かせないで

ア. 新出文型の使用実例提示……教師による実演／スライド・ビデオ・映画などの利用も可／場面・話題を設定した上での実演形式／教場での場面の実現。挿絵・スライドなどを利用しての場面設定／直接法による／小道具・絵・写真などの教具を使用

（展開 I）

イ. 新出文型の文型練習……学生に言わせる／場面・話題をとりかえて／フラッシュカード・小道具・絵・写真などの利用／語彙の挿し替え練習／拡張練習

ウ. 学習した各文型の板書……学習文型のまとめ／具体的な文例で雛型を示す

（展開 II）

エ. 既習文型または新出文型を使った組み合わせ複合練習……教師対学生、学生対学生／問答法による／返事、あいづち、あいさつ語などを適当に交ざる／教具使用／書きことば文型の場合は文連鎖の練習

(終結)

オ. 本文練習……本文の場面・話題を使つての文型複合練習の復習／教師との問答。または本文テープ使用／本文の場面を再現した上での練習／本文を少しずつ区切って聞かせる／本文中の人物A・Bの一方を消して、教師対学生（またはテープ対学生）の問答練習／その繰り返し

カ. 教科書を開かせての本文再練習……教科書本文を見ながら、オの練習の繰り返し／テープの通し聞き。または教師の通し読み／学生対学生の問答／本文の読み方練習ではない。目と耳からの併用による口頭練習の確認。

(評価)

キ. 既習文型・学習文型の総合練習の復習、確認……教師対学生、学生対学生、学生の独演／教師からの場面と話題の指示／既習文型・既習語彙を使用しての指示テーマにおける長い会話問答練習、または独演／絵・写真・地図・図表・図・小道具などの利用

(総復習)

ク. LLでの挿し替え練習、拡張練習、発音練習……イ～カの復習、および発音矯正／時間なければ省略も可

分析型授業の例

(導入) 学生に教科書を開かせないで／教師による「本文」の読み、または本文テープを利用して／テープ利用のほうが有効

ア. 本文テープの聞き……<1回め>通しでまず聞かせる

イ. 本文テープの聞き……<2回め>すこしずつ間を置いて聞かせる／話題は何か、場面はどこか、時はいつか、登場人物はだれか、各人物の人間関係などの確認。／それらを板書。

(展開 I)

- ウ. 本文テープの聞き……< 3 回め>一節ごとに止めて、質問を受け付ける／質問事項の板書／語意や用法に関する疑問の個所を確認
- エ. 質問事項の解明……新出語彙の意味と用法、新出文型の意味と用法を文型練習を通して解明／用例の提示／口頭による例文作成作業／文型練習

(展開 II)

- オ. 本文テープの聞き……< 4 回め>一節ごとに止めて、意味・用法の確認／教師から各節の内容に関する質問／本文の部分的理解
- カ. 本文テープの聞き……< 5 回め>通し読みの聞き／絵・スライド・映画・紙芝居などの利用が効果的／本文の話全体に関する内容上の質問／本文の全体的理解

(終結) 教科書を開かせて

- キ. 本文の黙読……教科書を見ながら本文テープの聞き< 6 回め>、文字を見ながらの再確認／イ～カの総復習
- ク. 本文の音読……文章の読みの練習／漢字の読みの確認
- ケ. 表記法の習得……ひらがなのつづり方、送りがな、漢字の練習／筆順練習
- コ. LLでの文型練習……挿し替え練習、拡張練習の復習(省略も可)／発音矯正

(評価)

- サ. 口頭作文練習……語彙や文型、言い回しなどを指示しての作話・作文練習／口頭発表／さらに作文として提出させる

6. 両授業形式の長短

部分からはいって全体に及ぶか、全体からはいって部分に至るかでまったく相反する二つの授業形式が生まれる。いま両授業形式の長所短所、それぞれの特性について気づいた点を挙げてみる。

総合型授業形式の特質

- (1) 会話や文章の表現力・作文力の養成に有利。
- (2) 新出文型の修得によい。
- (3) 新出語彙・新出漢字の多い課には不向き。
- (4) 読み学習に関して十分とは言えない。
- (5) 個々の文型練習から全体の文章や会話学習（本文学習）への移行がスムーズにいかない課がある。課ごとに、教案作成にくふうを凝らす必要あり。
- (6) 自然な会話の受け答えや、一連の表現を行なう力がつく。
- (7) 理解力よりは表現力養成に効果的。
- (8) 特に oral method 中心の初級前半の課，入門期学習に適している。

分析型授業形式の特質

- (1) 会話や文章の聴解力・理解力の養成に有利。
- (2) 語彙・文法事項の理解，使用法修得によい。
- (3) 新出語彙・新出漢字の多い課にも向いている。
- (4) 新出文型の理解修得には不利。
- (5) 全体の文章や会話学習（本文学習）から個々の文型練習・語彙学習への移行にギャップなし。教案作成が楽。どの課も一律に同じ形式で統一することが可能。
- (6) 文章の全体的はあく力，主題や話の主旨のはあく力がつく。
- (7) 表現力よりは理解力養成に効果的。
- (8) 読解作業を主とする中級学習への移行過程として最適。初級後半の課に向いている。

以上に紹介した二つのモデル授業を見てもわかるように、この初級教科書は、1日に4時間ないし6時間の多くの時間を割り当て、集中的に授業を行なうよう各課が編集されている。1コマずつの授業を毎日行なうより

は、隔日でもいいから1日に2コマなり3コマなりの時間を与え、その日に1課は確実に進めるほうが授業効果があがる。毎日少しずつ進めるこま切れ授業では、この教科書を使うかぎり、課ごとの導入・展開・終結の一連の授業運営がとぎれとぎれになってしまい、まとまりがつけにくい。この初級教科書の編集の基本は集中的授業にあり、各課はかなり盛りだくさんな内容を持っているのである。

(語研助教授)